

地域と学校 その1

石榑という地域と学校との出会い

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

鈴鹿山脈を望む緑豊かな環境に、地域の人々とともに創った学校がある。
2006年中部建築賞を受賞した三重県いなべ市石榑小学校。
「みんなで作る みんなのための新しい石榑小学校」を合言葉に、ワークショップの手法と時間を積み重ね、学校関係者、行政、設計者、地域住民の熱い想いが結実した学校施設だ。
建設委員会のメンバーとして関わった名古屋大学の小松尚さんに、その歩みとともに、地域と学校のあり方、またこれからの公共施設について、1年にわたる連載で展望していただきます。

地域コミュニティの拠点として

学校は明治以来、少なくとも戦前までは地域のシンボルでした。最も立派な公共施設が学校だったという地域も少なくありません。夏の夜の盆踊りや映画会、秋の運動会など、地域のイベント会場でもありました。私(40歳)よりも年配の方なら、そのような経験を懐かしく思い出される方も多いでしょう。

私は父親の仕事の関係で2年間、三重県は久居の小学校に通いました。当時すでに創立100周年を迎えた歴史のある学校で、まだ木造校舎でした。その木造校舎は2年目に鉄筋コンクリートの校舎に建て替わりました。真新しい校舎に入れてうれしかったことを覚えています。歩くときギンギン鳴った木造校舎の廊下の音は、今でも耳に残っています。

それ以降、三重県との関わりはなかったのですが、縁があって2002年からいなべ市(当時は大安町)にある石榑小学校の校舎改築計画に参加しました。石榑という地は、鈴鹿山系の竜ヶ岳の麓に位置し、田園や里山に囲まれたところ。私にとって三重弁に触れることや東に海、西に山を臨む地理はなじみやすかったのですが、校舎改築計画の毎回の会議に出かけ続けるにつれて、この学校に関わる地域の人々の存在や力に深く感嘆し、同時に関心を抱くようになったのです。

この校舎改築の計画は、学校関係者、教育委員会、行政、PTA、地域自治会の代表者らが集まった建設委員会という場で、設計事務所が提示するデザイン案をもとに検討と合意を重ねていきました。その中で、教育施設



校舎の南側外観。
名産「石榑茶」の茶畑が建物屋根のモチーフに。

として以上に地域コミュニティの拠点として学校を再整備することが、計画の大きなテーマになっていました。そのため地域の代表者が全体の約3分の1、同じくPTAメンバーも約3分の1を占めていました。

出会いと関わり

私がこの建設委員会に関わるようになったのは、建設委員会発足後約1年半の時点でした。校舎建て替えの構想はその数年前から始まっており、2001年度からは正式に建設委員会が発足し、2002年度からは文部科学省「コミュニティ拠点としての学校施設整備に関するパイロットモデル研究校」に指定され、建築設計事務所を加えて計画が本格的に進んでいました。

初めて石榑に向き建設委員会に出席したのは、建設委員会で具体的な建て替え計画の検討が始まって半年ほど過ぎた2002年10月でした。公開討論会として計画の経過報告と議論を行うので、外部の目で計画にコメントしてほしいという依頼でした。

このとき、実を言うと、大丈夫かな?と思いながら、覚王山商店街のお祭りで行っていたワークショップを途中退席して近鉄電車に乗り込んだのです。というのも、私も若造ながら学識経験者という立場で行くわけですが、計画の開始段階ならいざしらず、計画の途中で来て欲しいということは、何か計画上の問題で地域と学校や行政が対立しているのではないかと、ワークショップ形式での議論が上手くいっていないのではないかと、と一人心配していたのです。そうでなければ、ワークショップでの公園や街



学校を見下ろす山々。旧校舎が取り除かれて、学校から竜ヶ岳(写真中央奥)を臨む風景がよみがえった。



中庭を囲む「わかっ型」校舎。
中庭は敷地のレベル差にあわせて少しずつ床レベルが下がっていく。



休み時間に中庭で遊ぶ子どもたち。
上履のまま出られるので、短い休み時間でも子どもたちは駆け出していく。

路の整備経験はあるものの、特に学校建築を専門に研究したり、設計の実績があるわけでもない私を呼ぶわけがないよなあ、と。

会場は、今は取り壊されてしまった体育館でした。壇上のステージに上がることも違和感を感じましたが、ここまで来ては仕方ありませんので大人しく上がりました。これまでの建設委員会の検討経過の説明や、いくつかの議題に対する意見交換を小1時間じっと聞いているにつれて、心配は杞憂であることがわかり、半分くらい仕事が終わった気分になりました。今となっては笑い話です。

公開討論会の後、ぜひ普段の建設委員会にも出てくださいと言われて、出席するようになりました。その建設委員会の毎回の会合で印象的だったのは、出席者がよくしゃべっていたことです。重い沈黙の時間や一方的な演説を、黙って、耐え忍んで聞いているのではなく…(文字にすると安っぽいですが)、学校、行政、地域との信頼関係を感じさせる言葉のキャッチボールが行われていたのです。過去には別のある街で、行政に対する日頃の不満のはけ口となってしまった公園デザインの公開検討会も経験した私にとっては、地域と学校のひとつの求める姿がすでにあるように感じました。

ですから、公開討論会で初めて石榑の地を訪れた後、私がこの地域と学校に併走していこうと決めるのに時間はそうかかりませんでした。

地域と学校のあるべき姿をみつめて

この建て替え計画の最初の段階で、学校と地域にとって、また建築計画上とても重要な決断と行動がありました。現在(当時)の敷地内での建て替えでは、工事中の子どもたちの生活や、地域との関係を重視した学校とするには不十分だということから、東隣の土地(当時は田畑)を購入しようという判断を建設委員会がしたのです。地主との交渉は当然、建設委員会の住民メンバーが行いました。この話を聞いた時、私にはわかには信じられませんでした。しかし、建設委員会をはじめ、いろいろな機会に地域の方々の振る舞いを見るにつけ、購入までこぎ着けたのはすごいことですが、その前提となる地域の行動力は、石榑ではさして驚くようなことでもないかなと思うようになりました。

建て替えの計画と工事は順調に進み、2005年1月に校舎が完成し、3学期から新しい校舎を使い始めました。次いで2006年2月には体育館が、2007年3月には屋外環境が完成し、建て替え工事は全て終了(設計は石本建築事務所、施工は戸田建設)。この間、建設委員会は2007年3月9日の最終回まで53回を数えました。

校舎建て替えという地域と学校にとっての一大プロジェクトは終了しましたが、この6月から石榑小学校は学校運営協議会を中心に学校を運営する「コミュニティスクール」として動き出しました。これまでも「地域を学び、地域に学び、地域と共に育つ子どもを育てる学校」を目標としてきた石榑小学校ですが、地域との協働による本格的な学校運営が始まりました。また今年(2007年)は創立100周年を迎え、今年1月から地域が主体的に各種行事等の計画を進めています。

そこで、この連載では、石榑小学校の校舎建替のプロセスやその後の様子を紹介しながら、私なりに地域と学校について見つめ直してみたいと思います。また、石榑小学校は、2006年中部建築賞(入選)などの受賞から建築的にも評価されています。約3mの敷地の高低差を利用して上が教室群、下が特別教室と地域利用スペースという構成をとり、同一階に全ての普通教室を配置しています。また、校舎に囲まれて配置された中庭は上履のまま利用できます。さらに、敷地を広げたおかげで再びよみがえった竜ヶ岳を臨む大景観、敷地外周には塀やフェンスを設けず、むしろ通り抜けもできる散策路を設けた計画は、石榑の人々の学校に対する考えを明確に表していると言えるでしょう。子どもたちの生活ぶりや地域住民の関わりの様子、私の研究室で企画実施している子どもデザインワークショップも紹介します。それを通して、学校や広く地域施設の可能性やあるべき姿についても探っていきます。

プロフィール
1992年名古屋大学大学院修了後、名古屋大学助手、講師、助教授を経て2007年4月から名古屋大学准教授。博士(工学)、一級建築士。専門は建築計画、居場所論、子ども建築学習、大学・地域連携論など。
E-MAIL:c42719a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
URL:http://www.env.nagoya-u.ac.jp/profile/110.html